説教要旨　「種は蒔かれた」

ルカによる福音書８章４～１５節

種を蒔く人が種まきに出て行き、いろいろな土地に種を蒔いた。ある種は道端に落ちたが、人に踏みつけられ、ついには空の鳥の餌食となってしまった。別の種は石が多い土地に落ち、根づくことができないうちに水気を失い、枯れ果ててしまった。またある種は茨の中に落ちたため、茨が覆いかぶさり、せっかく出た芽が成長せずに終わってしまった。しかし良い土地に落ちた種は生え出て百倍もの実を結んだ、と言うたとえ話をイエス様は語られました。

よく考えてみるとこの話は不思議です。それはこの種を蒔く人は、なぜこんなに無駄なことをやっているんだろう、と疑問に思うのです。なぜ道端なんかに種を蒔いてしまうのか。なぜ石地なんかに種を蒔いたりするのか。なぜ茨の中に種まきをするのか。初めから良い土地にまっしぐらに出かけていって、そこに種を蒔けば種は無駄にならずに済むのに、なぜこんなに効率の悪い種蒔きをするのか…。この種蒔く人の蒔き方は、蒔くというよりもバラまいているという感じです。あたりかまわず､そこら中に蒔き散らしながら歩き回っているのです。それがイエス様の語る種蒔き人の姿です。効率の悪い、要領を得ない種蒔き人です。

この種まき人は、そこが道ばたであろうと、石地であろうと、茨の中であろうと、種を蒔いているのです。効率なぞ度外視です。それは、私たちが道ばたであろうと石地であろうと茨であろうとも関係ない。そんなことは全く関係なく神さまは、ここに種を蒔いて下さったのです。私たちは自分が道ばたであったり、石地であったりすることを嘆く必要は無いのです。むしろ、道ばたであり、石地であり茨に覆われているこの私に、神さまは種を蒔いて下さった。この驚くべき御業をどうして嘆くことが出来るでしょうか。私たちはこのことを素直に喜び、感謝を持って歩めばよいのです。

「見よ、種まきが種を蒔きに出て行った」

主が先立って、私たちには不毛に思えるような土地へ種を蒔きに出て行かれたのです。

（２０１８・１１・１１　説教者：稲垣真実）